

図版5



大岩北側石組み



大岩東側遺物出土状況



S I 01検出状況

図版6



S I 01遺物出土状況
(南より)



S I 01遺物出土状況
(東より)



S I 01南北土層断面



S I 01 褶形土器出土状況



S I 01貯藏穴遺物出土状況



S I 01完掘状況

圖版8



S I 02遺物出土状况



S I 02完掘状况



S I 03完掘状况

図版9

加工段05完掘状況



S I 05完掘状況



図版10



S I 04
(セクションを残した状況)



S X 01 完掘状況



加工段01調査風景

図版11



加工段01遺物出土状況



加工段01遺物出土状況

图版12



加工段01遺物出土狀況



加工段01完掘状况

図版13



調査区東側黒色土層検出状況



加工段03・04（セクションを残した状況）

図版14



S K 01遺物出土状況

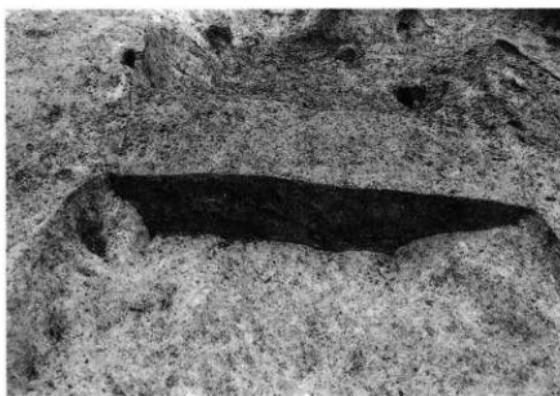


S K 02遺物出土状況

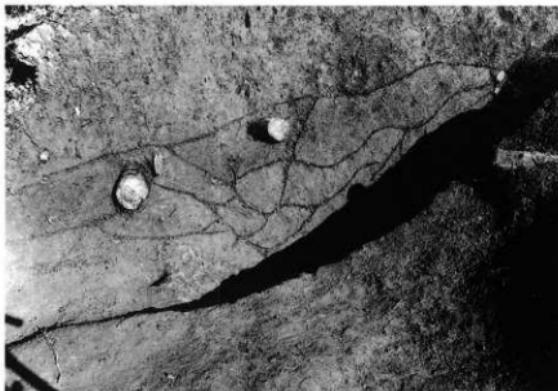


S K 05土層断面

図版15



圖版16

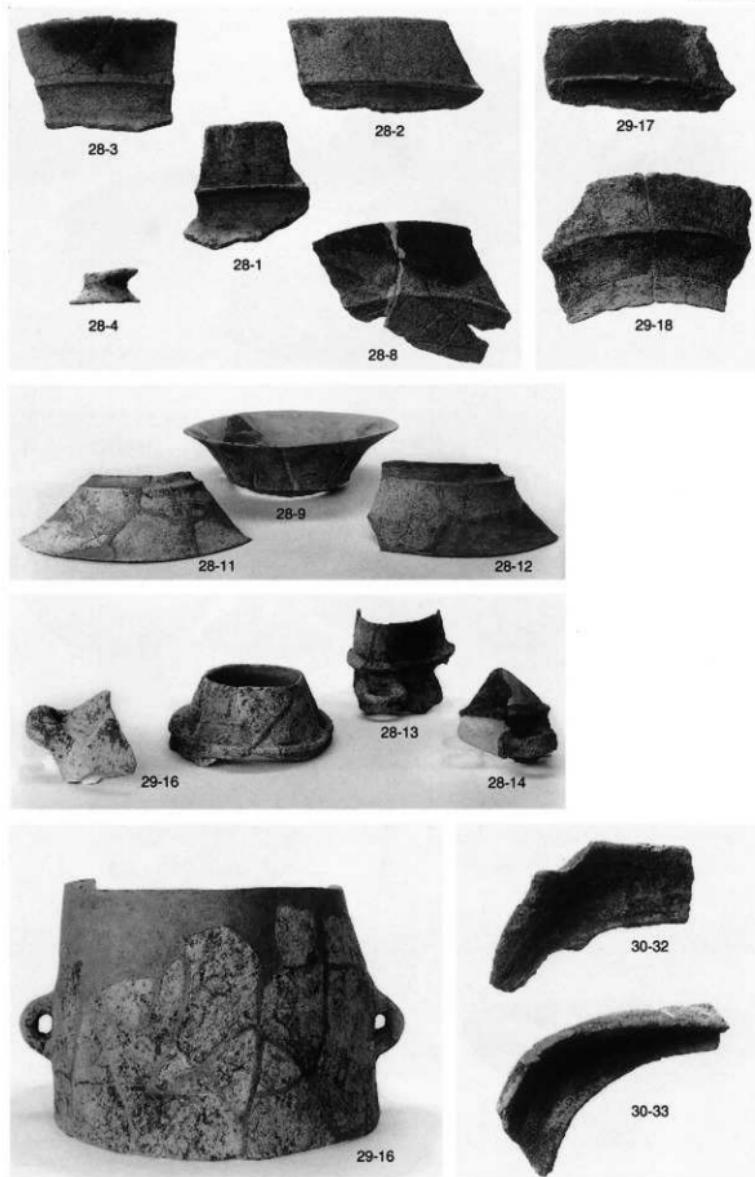


S D 02土層断面



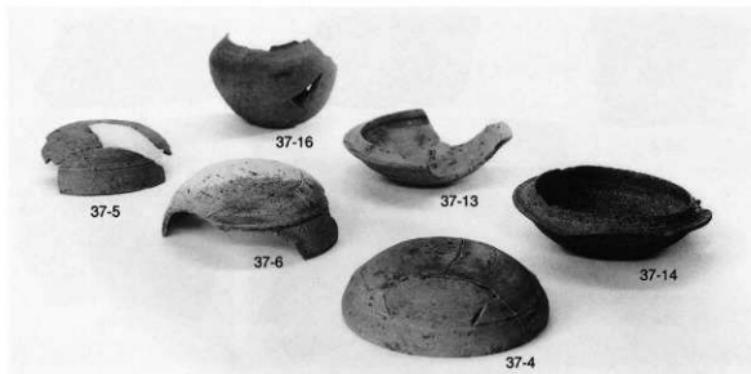
S D 02遺物出土状況

図版17

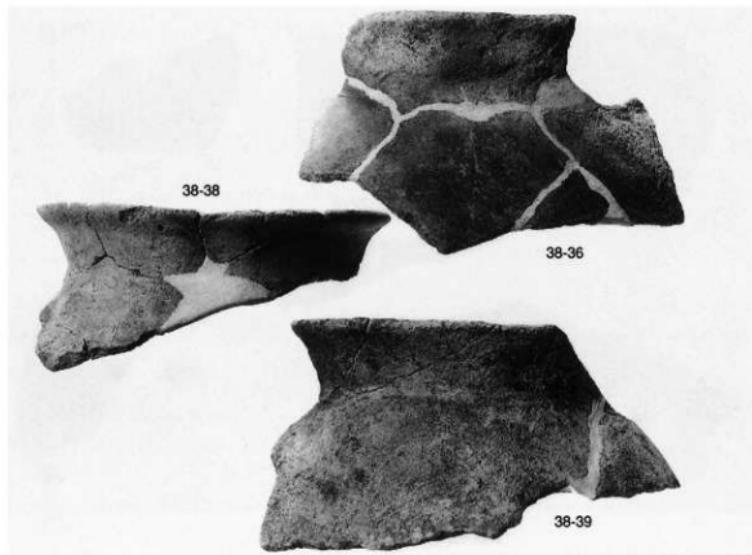
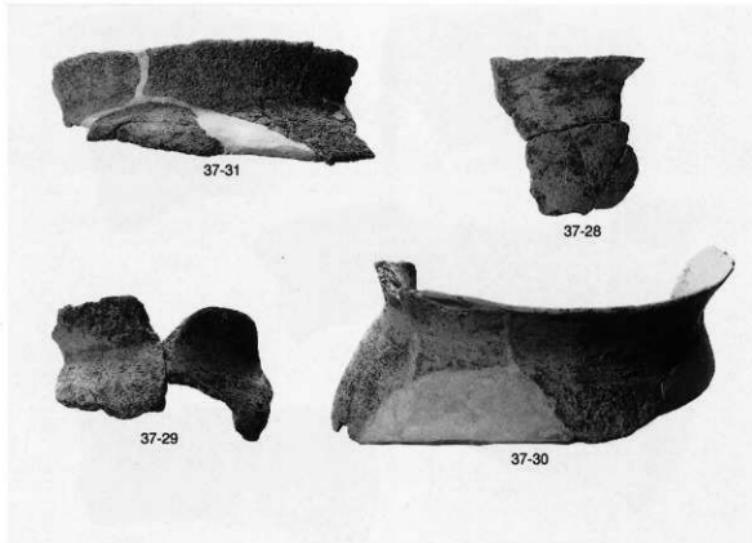


長溫遺跡II区S101出土遺物

図版18

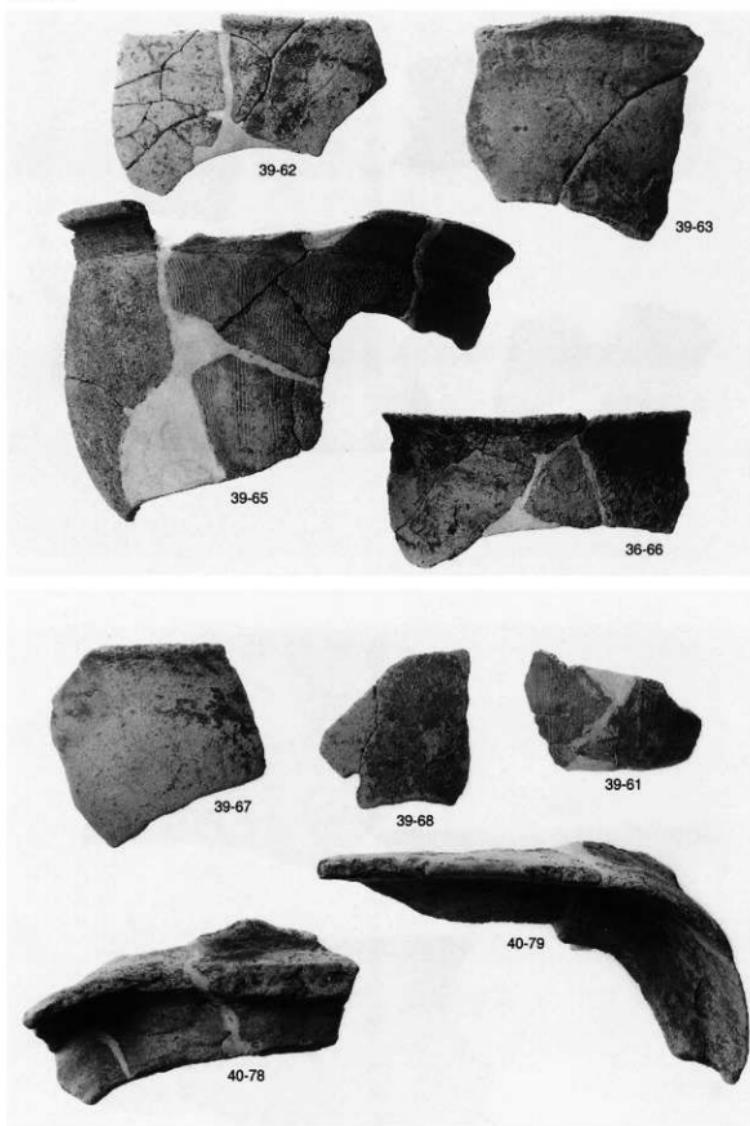


長楨遺跡Ⅱ区加工段01出土遺物（1）



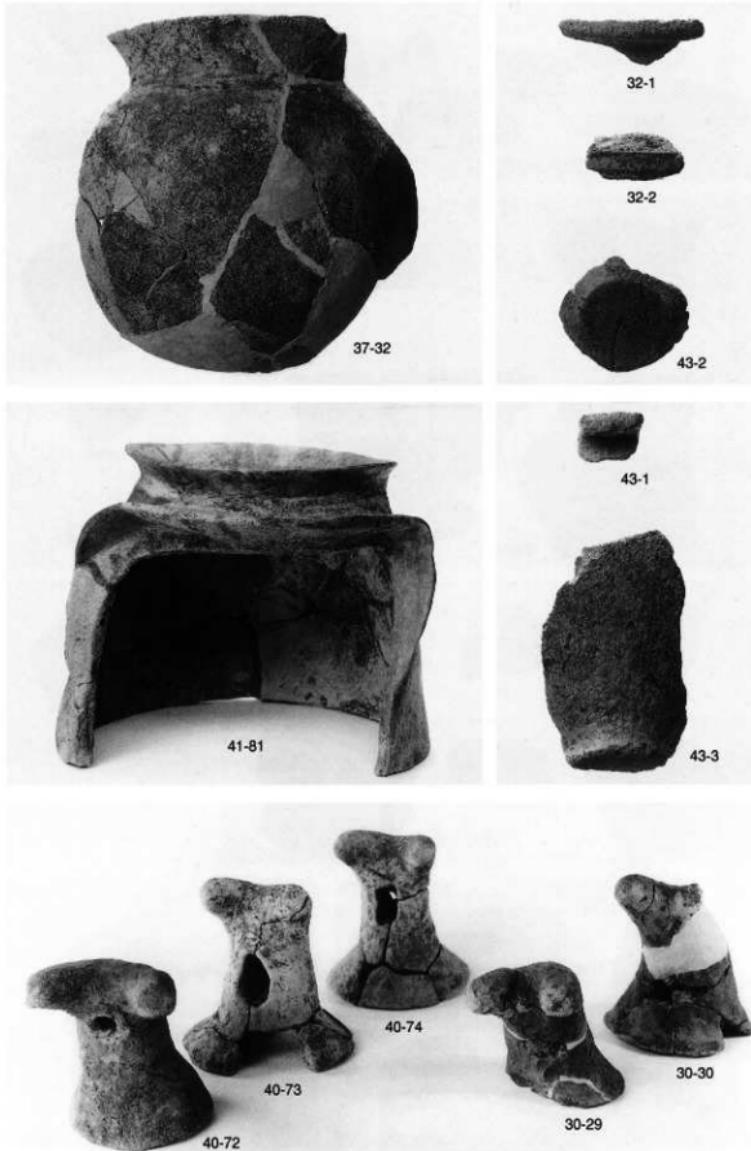
長柵遺跡Ⅱ区加工段01出土遺物(2)

図版20



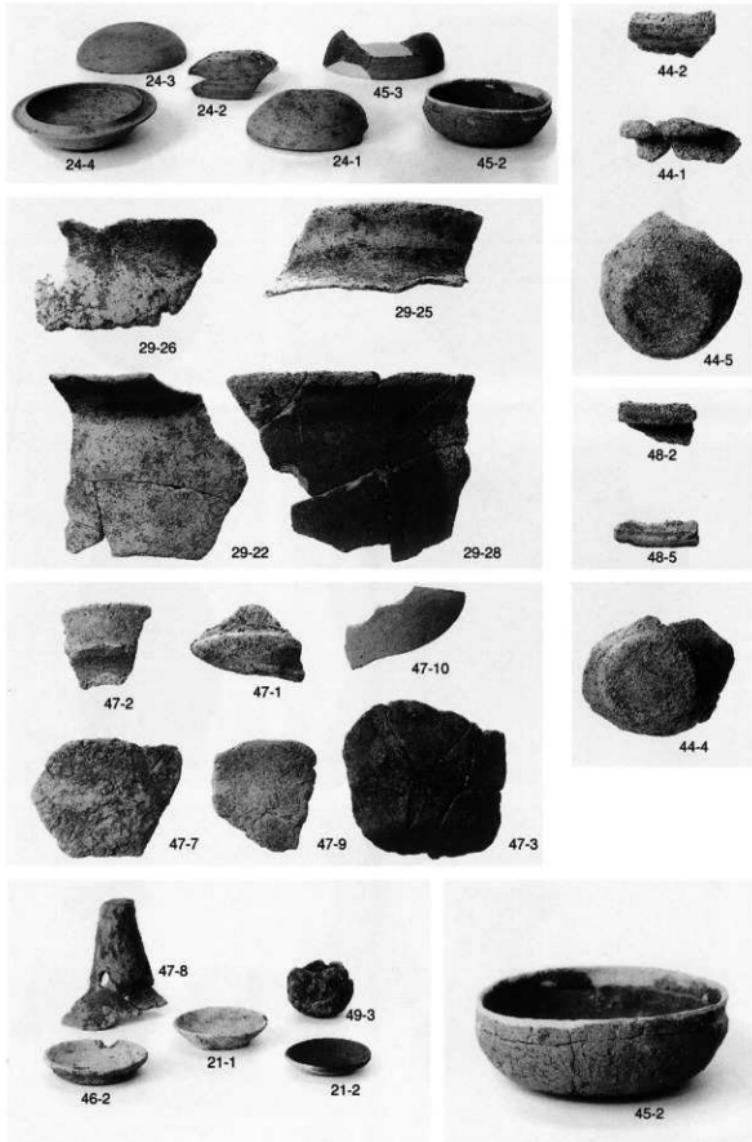
長編遺跡II区加工段01出土遺物 (3)

図版21

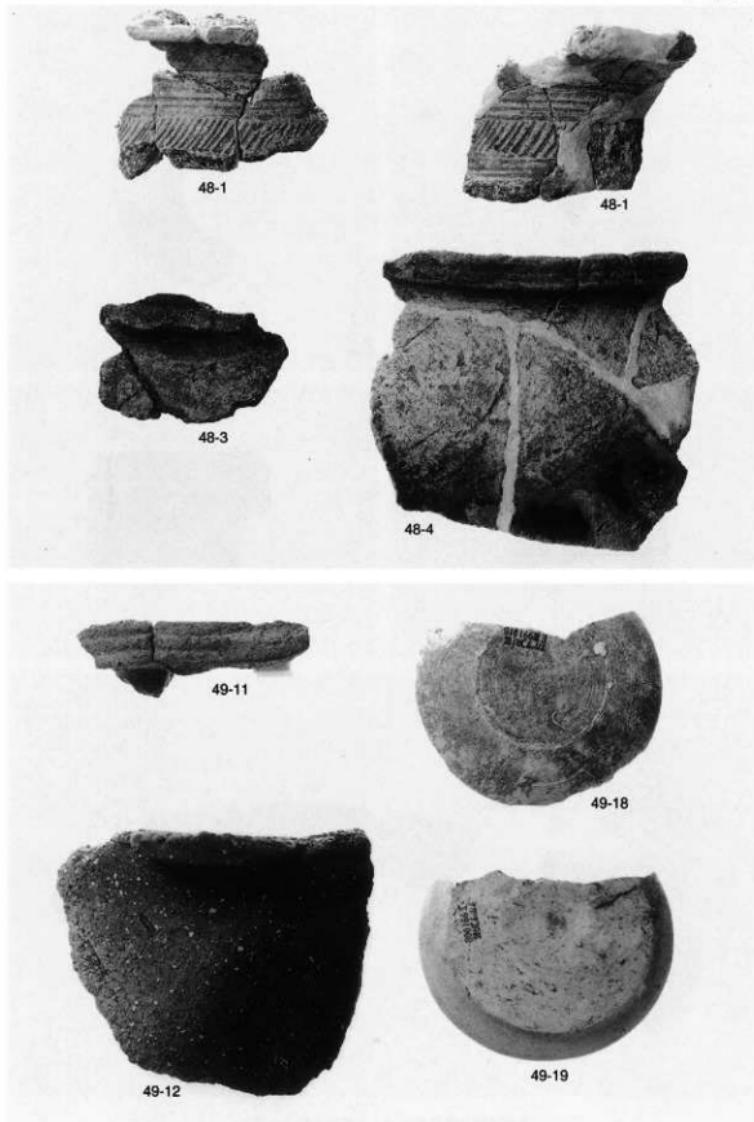


長沼遺跡II区加工段01(4)・S101・S103・加工段03出土遺物

図版22

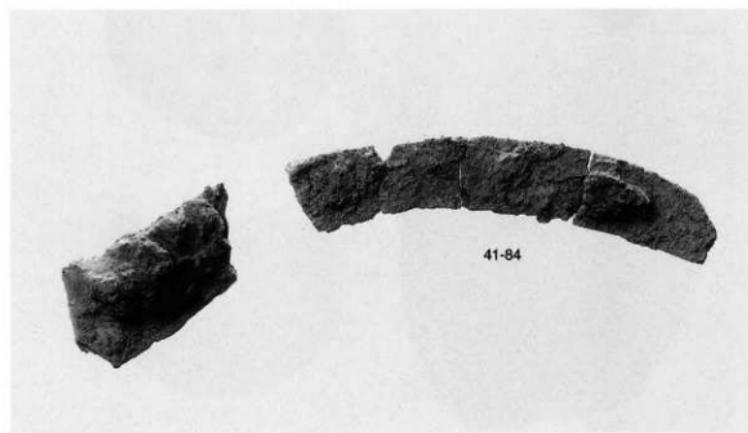
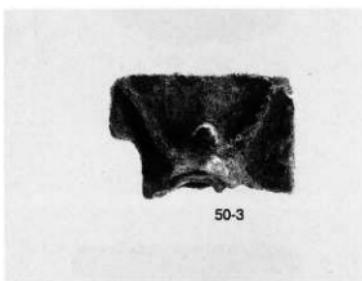
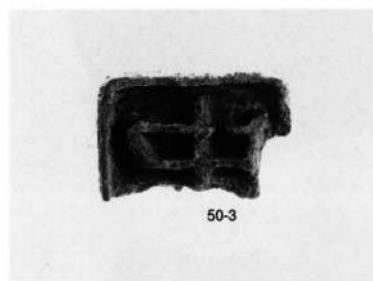
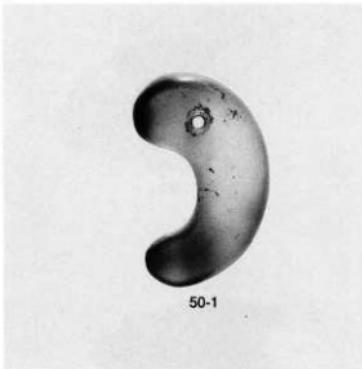


長治遺跡Ⅰ区大岩・Ⅱ区S X01・S I01・加工段05、S K02・03・S D01・02・03出土遺物



長遼遺跡 II 区 S D 03・調査区出土遺物

図版24



長廻遺跡 II 区加工段01・II区調査区出土遺物

第5章 自然科学的分析

出雲市長廻遺跡出土銅印の非破壊分析結果について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 永嶋正春

出雲市長廻遺跡出土銅印の非破壊分析結果について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 水嶋正春

はじめに

標記の遺跡から出土した銅印1点について非破壊的な分析調査を実施したので、その結果を要約して報告する。

本遺跡からは弥生時代、古墳時代の遺構が検出されているが、銅印そのものは表土直下からの出土であり、時代を確実に推定するための遺構・遺物を伴ってはおらず、銅印そのものの有する情報から時代比定すべき事情にある。筆者はかねてより古代を中心とした出土・伝世銅印について網羅的な非破壊分析調査を実施してきており、その結果として、概ね古代（奈良・平安時代）の銅印であるのか、近世あるいは近世以降のものであるのかを識別している。本銅印は、その外観形態からしてすなおに古代のものであるというのにはためらわれる事情にあり、したがって筆者の実施している常法に則って分析調査を実施し、その結果をも加味して資料評価をすると有効であると考えられる。

以上の判断に基づき、次の3つの調査を実施した。

- ・蛍光X線分析
- ・X線透過検査
- ・密度測定

調査方法の内容、意味合いなどについては文末の参考欄に掲げた文献等を参考にしていただくとして、ここではその結果の概略を報告する。

調査結果

蛍光X線分析結果

本銅印は、銅 (Cu)、鉛 (Pb) を主体とする青銅であるが、これに少量のヒ素 (As)、亜鉛 (Zn)、スズ (Sn) が加わることで構成されている。他に微少成分としては、アンチモン (Sb)、銀 (Ag) などが認められるが、銀の存在量は目立ったものではなく、またビスマス (Bi) はほとんど検出されていない。

筆者がこれまでに実施している40例を超える銅印の分析結果でいえば、上記の成分内容は近世あるいはそれ以降の銅印の場合、よく見られるものであるが、古代に属する銅印でこの種の成分構成を持つものは皆無である。

X線透過像・密度

X線透過像としては、顕著な鬆の存在は認められず、また細かな鬆についても確認し難い。すなわち十分緻密に鋳造された銅印と判断できる。

銅印の質量は、現況で10.5609g、密度は7.71g/cm³である。近世あるいは近世以降の印の密度は、通常では8g/cm³以上の値を示すことからすれば小さな値と言えるが、測定例のほとんどすべてが伝世ないしそれに近い状況のものであることを考慮すべきであろう。本銅印は鋳の生成状況からみて相当期間土中に埋没していたことは確かであり、そのための成分の溶脱、表面部の鏽化、土等の付着はすべて密度を軽減する方向に働く。このこととX線透過像の状況とを勘案すれば、銅印の当初の密度が8g/cm³であったと想定することはさほど困難ではない。

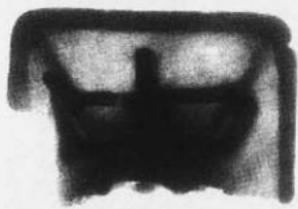
以上の調査結果を総合的に判断すると、本出土銅印は近世のものと判断するのが妥当である。

おわりに

標記遺跡から出土した銅印を非破壊的な手法で分析調査し、その結果をもとに近世に属する銅印と判断した。その形態的特徴と江戸期の銅印にまつわる諸状況からみて、江戸後期のものとみては間違いないものと思われる。なお、今後も類例を捕捉していくことでさらに確度の高い議論をすることも必要である。

参考

国立歴史民俗博物館研究報告79集「日本古代印の基礎的研究」1999年3月、並びに拙稿「非破壊的手法による銅印の科学的研究」(同書中に収載)



報告書抄録

フリガナ	ナガサコヨコアナボグン、ナガサコイセキ					
書名	長廻横穴墓群、長廻遺跡（Vol. 1）					
シリーズ名	斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	X III					
編著者名	伊藤 智、平石 充					
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター					
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL0852 36-8608（代）					
発行年月日	2001年3月30日					
所収遺跡名	所在地	調査期間	北緯	東経	調査面積	調査原因
長廻横穴墓群 出雲市大津町	島根県 出雲市 大津町	H12.4.17 H12.9.29	35°20'57" 35°20'54"	132°47'18" 132°47'19"	6,310m ² 800m ²	放水路建設 放水路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
長廻横穴墓群	横穴墓	古墳時代後期 近世	横穴墓	土師質土器 陶磁器		
長廻遺跡	集落跡	弥生時代中期～後期 弥生時代終末～古墳時代初頭	堅穴建物 土坑 溝 大岩	弥生土器 土師器 須恵器 鎌・銅印	近世の擬古印出土	

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 XIII

長廻横穴墓群・長廻遺跡(Vol.1)

2001年3月発行

発行 島根県教育委員会
国土交通省出雲工事事務所

編集 島根県教育厅埋蔵文化財調査センター
〒690-0131 島根県松江市打出町36
TEL 0852-36-8608

<http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/>

印刷 総合印刷株式会社